

S-2 明治以降の大津波災害とその記録の残し方—山田町を事例に—

田村俊和（東北大・名誉教授）

自然災害とは、一般に、ある自然現象（地球の営み）を発災要因（加害外力）として、ある地域に、いろいろな自然的・人為的現象が次々と発生し、身体・財産等が損傷するまでの全過程を指す。そのようすを、防災にも役立つように、後世や他地域の人びとに伝達するには、生々しい事例を示して感情にも訴える伝承が、ある面では効果的である。しかし、裏づけとなる客観資料を欠いた伝承は、時間が経つと単なる訓話と受け取られるようになりがちで、それだけでは有効な災害記録になりにくい。

客観資料としては、集計した数値だけでなく、発災要因から諸現象の連鎖を経て個別の被害に至る経路が着実にたどれるような情報が有用である。被害の種類にもよるが、被災に連なる自然的・人為的諸現象の具体的様相、およびその位置・時刻等を記録することは、その体制が潜在的にあればそれほど困難ではなく、避難・救助行動と並行してでもある程度可能なことが、従来の実践例から窺われる。また、発災から被災に至るまでに生じた諸現象の、単なる位置だけでなくその場の属性に関する情報は、他地域や後世の人びとが災害過程を正しく理解する上で欠かせない。

そのようなローカル基礎情報は、山田などでの従来の津波災害記録（下の表の右端欄）をみると、cを付したものに比較的多い。その収集・整理の担い手は、警察・学校関係者や郷土史研究家等 個別事象の観察と記録を心がけた地元の人材、および被災直後に直接観察し、関連情報を幅広く集め、空間・時間軸で整理して報告した調査研究者達であった（次ページのリスト）。今後、社会や技術が変化する中で、「災害アーカイブ」とも分担・連携しつつこのような報告・記録の作成を可能にしていくには、…

山田町とその近隣地域における明治以降の主な津波災害とその調査報告・記録

地震津波名称	発生年 月日	震源・波源域 地震規模	津波高 死者・行方不明者数でみた被害規模	調査報告・ 記録例*
(明治 10 年)	1877 5.10.	チリ北部沖 M8.3	釜石 3m.	
明治三陸(沖)	1896 6.15.	宮古東方、海溝軸 のごく近く M8.2	綾里 38m; 小谷鳥 15m, 船越 湾岸 9~15m, 山田湾岸 3~5m. 全国 2.2 万, 岩手県 1.8 万, 現山田町域 3 千	11a, 12c, 13c, 14
昭和三陸(沖)	1933 3.3.	大船渡東方、海溝軸 の向こう側 M8.1	綾里 29m; 小谷鳥 7m, 船越 湾岸 4~5m, 山田湾岸 2~4m. 全国 3 千, 岩手県約 2600, 現山田町域約 20	21a, 22ab, 23bc, 24bc, 25, 26c, 27c
チリ	1960 5.23.	チリ南部沖 Mw9.5	三陸沿岸で 5~6m; 船越湾岸 3~5m, 山田湾岸 3~5m. 全国約 140, 山田町 0	31abc, 32bc, 33bc, 34bc, 35c, 36c
1968 年 十勝沖	1968 5.16.	八戸東方、海溝軸 より陸側 M7.9	宮古湾・船越湾 5m 以上.	
2011 年 東北地方 太平洋沖	2011 3.11.	岩手県沖から千葉 県沖に至る 500km ×200km, 海溝軸 より陸側 Mw9.1	閉伊崎 54m; 小谷鳥 30m, 船越 湾岸 16~18m, 山田湾岸 7~12m. 全国 2.2 万(津波以外を含む), 岩手県 約 5800, 山田町 約 800.	41a, 42bc, 43ab, 44abc, 45bc, 46, 47.

\* a: 広域的に発災要因を論じている。 b: 特定の種類の被害に詳しい。 c: 現場の状況に詳しい部分がある。 各番号に対応する報告・記録の名称等は次頁参照。